假橋を踏めば信濃の秋の風心定めずゆらゆらと吹く（千曲川を渡りて二首）

空晴るる日は曇るとよ千曲川さはな愁ひそ人咎むるに

我が子らの眠れる町の夜の空の薄赤くして丘に螻蛄鳴く

ひぐらしの聲に混りて降る雨の涼しき秋の夕まぐれかな

箱根行く雪を螺鈿に鏤めし神山おろし寒き夕暮（また函根にて二首）

川ならぬ時の流れの氷れかし斯くの如くに踏みて行かまし

雪ののち紅梅病めりくちばしのあらば藥を啄ませまし

春となり幻の身がかたちをばあらはすごとき梅の花かな

上げ潮に春の小雨の加はりて動き初めたる平潟の船（武藏の金澤にて）

窓鎖さで寢れど天城の頂と今さら何を語るべき我（熱海にて）

戀をする大和魂盡き果てぬ山を讃へん唐詩に擬して（奥多摩の氷川にて）

ひがし山末の伏見は低くして陶器燒けり竹原のすそ（京にて）

春の雁比叡の根本中堂に逢へるも知らずみづうみも越ゆ

山吹の白花となり零るるや春の夕もひややかにして

眞白くて五月櫻の寂しきを延元陵に云へる僧かな（吉野にて）

ただ子等の樂しき家とつづけかしわが學院の敷石の道

町名をば順に數ふる早わざを妹たちに敎へしは誰れ

人よりも思ひ上れる娘をばなでふ見知らん悲しき敎師

彗星の夜半に至りて出づるとよ胸を云へるか空を云へるか

從はぬ心は心いとせめて變りはてぬと人の云へかし

曉にもの思ふこそをかしけれ戀の初めにまなびし如く

少女子とロオランサンの繪を見れど雁ぞ鳴くなる東京の秋

山桑をうどんげの實と名づけたり先生いかに寂しかりけん（輕井澤の莫哀山莊にて）

手におかば山櫻ほど冷たくて薔薇ほど重き思ひならまし

わが在りし一日片時子のために宜しかりしを疑はぬのみ（死を前に二首）

汝が母は生きて持ちつる心ほど暗きところに在りと思ふな

逃水の不思議を聞けど驚かず滿洲の野も戀をするのみ（以下滿蒙に遊びて）

逢ひがたき人と遼河の船にあり午後四時の日よ座をば動くな

わが乘れる轎におくれて同行の馬來る外は高粱の畑

淺みどり梨の若葉のそよぐ頃轎して入りぬ千山の溪

ことごとく四十八溪を越えぬ間に寂しくなりぬ千山の路

紫丁香香の夕山に滿ちわたるなかに立ちたる大安禪寺

なほ白く梨の一木の殘りたるいただき近き寺の客房

日の本の法師よりけに節立てる法師に借れる草枕かな

あまた度目覺めあまたの夢を見ぬ山寺と云ふ處に寢れど

曉の山の法師の經聲は支那と云へどもかなしかりけれ

片端も溪の水より冷たけれ支那の御寺のあんぺらの床

梨の花白きを傳ひ朝風の溪上り來る大安寺かな

朝風や峰づたひしてうぐひすを幽かに聞ける千山の奥

溪せまく轎を用ひずなりしのち身に沁み渡る山の風かな

日光の陽明門の形するものの崩れて人非を拔く

屋根白く日のあたりたる木魚庵唯一つ見え鶯ぞ啼く

無量觀道士の寺の客堂に入ればたちまち山風おこる

無量觀わが捨てがたき思ひをば捨てえし人の青き道服

伴へる支那の奴が指立てぬ時を問へるや戀を問へるや

道士達松風をもて送らんと云ひつる如く後ろより吹く

旅人を風が臼にて摺るごとく思ふ峠の大木のもと

湯崗子君が馬して出でし日もこの夕にも散る柳絮かな

湯崗子左の窓に入り來るはかぐろき炙の子右は落日

曹達とて沙より白きもの涌けば美しけれど草無き野かな

湯崗子蛙啼くなるゆふぐれに柳の絮のしのび來る窓

柳絮をば混ぜて燕の渦卷けり中にしたるは白塔にして（遼陽にて）

夕月夜逢ひに行く子を妨げて綿の如くにまろがる柳絮

尺とりが鴨綠江の三尺に足らぬを示す蘆原の中（安東にて三首）

江の中の筏憩へる小景に女もまじりなつかしきかな

我なげく滿ちたるもののめでたさと寂しさをもつ大江の水

昨日今日興安嶺を發したる河のみ見れど逢はぬ山かな（四洮線にて）

旅人が思ひしさまにやや過ぎて寂し蒙古の洮南の風

嫩江の島の柳の中分くる月光色の吳夫人の靴（齊齊哈爾にて六首）

瞰江を前に正しく横たへて閻浮檀金の日の沈み行く

柳原綠金をして川すでに暗きゆふべの雁の聲かな

嫩江の岸水莊のあるじなる將軍が指す春の雁がね

旅人に吳竹色のうすものを人贈る夜の春の雁がね

月夜よし夫人手兵を伴ひて我を送れるちちはるの城

哈爾賓は帝政の世の夢のごと白き花のみ咲く五月かな

將軍の夜遊のむかし千人のつどひし園に溜れる楡錢

野の草の花束を賣る哈爾賓の街を歩むは溫室の花

マアルシユカ、ナタアシヤなどの冠りもの稀に色めく寬城子かな

わが汽車はたんぽぽの穗の白きをば傳ひて入りぬ土們嶺站（吉林に遊びて）

土們嶺梅蘭芳の舞衣の袖の裄ほどながき山かな

說書生彈きがたりする蛇皮線に拍手を送る楡の葉の風

吉林の古著の市の一枚の韈かとばかり我あはれなり

吉林の龍潭山に蓬をば嗅ぐひと時のなつかしきかな

松の實を杖のかしらに人割るも砧めきたる吉林の汽車

わが朝の元祿頃の髮結ひて吉林の町練るは誰が子ぞ

大きなる川諸共に吉林の城暮れんとす低きところに

飲馬浦と云ふ驛の名の讀まるるも白き柳絮の明りならまし

文廟のあるべからざるところなり城側は皆菲の香にして（長春）

公主嶺豚舍に運ぶ水桶の柳絮に追はれ雲雀に突かる

旅人が來て倚る楡の木の下へ綴く寄り來る牧草の波

重なれる山は浅葱の繻子の襞運河は夏のうすものの襞

撫順にて露天掘りする炭のごと得てましものを一切の事

牛を引き七夕のごと野を歩む滿人見ゆる夕あかりかな

夏草の覆ひもはてず塚なるは塚の形に伸びてはかなし

旅人は獨り思はず野も水も雲も愁ひをともにこそすれ(以上)

既に我が別れの涙零れ初め朧になりぬ黄昏の濱(星ヶ浦にて)

嫩江の洲の柳原分けたらば必ず君を見ん心地する(吳夫人を偲びて二首)

齊齊哈爾を夜半に立ちつる旅人は月見る度に君をこそ思へ

大君の薩摩の國に龍王の都續くと見ゆる海かな(鹿兒島にて)

乾煙草棚より垂るる葉を潛り白き鶏出づ女の童出づ(西國分にて)

霧島や神代の卷に歸り入る霧と思ひて我も伴なふ(以下霧島にて)

霧島の韓國岳の麓にてわがしたしめる夏の夜の月

霧島の榮の尾の前の山の戸は迫れど見ゆる海の月明

瀧の湯の落つるところに身を置かず人間苦をば積みたりしかな

霧島は未だ明けずと云ふ月のあれど目覺めし鶯ぞ啼く

我が友が榮の尾を立ちて入る山は木のいと暗しほととぎす啼く

高高と杉木立にも這ひ上り山風吹けばなびく葛の葉

牧園へ太鼓踊を見に來よと使きたりぬ瓜を割る時

瀧の湯に鼓を打てる溫泉の外はおもはぬ夜の枕かな

山の木の三千年の根を踏みて人湖へかよふ路かな

霧島の高き峰をば行く日さへ心あがらずなりにけるかな

風立ちぬ韓國岳に續く草裏葉を返しほととぎす啼く

湖をかこめる山の笹原に鳴るはさびしき霧島の風

山上のをだまき草の莖よりもよし細くとも海現れよ

硫黄の黄狐の色の羽の蝶も吹かれ行くかな高原の風

白雲の倚る高千穂を眺めよと輿丁寢入りぬ薄の中に

高千穂を雲去來するかたはらの芭蕉葉色の若き中山

秋立つや貝の肌に似る雲のつつめる神の高千穂の山

ひぐらしが馬行く後に鈴振るや山の中なる三叉の辻

浴泉を霧島の神いましめずかしこし此處に心清まれ

樋の竹が八つの湯瀧を落すなるそのもとに居て物をこそ思へ

樓に我一人となりて山に告ぐ斯かる夕に人戀ひしこと

山の夜や我も嬬娥の身となりて浴槽の雲を行き戻りする

樂しみの盡きしにあらず初めより哀れなる身の草枕かな

溫泉にも隼人の猛きたましひの備はる國の山に來しかな

朝の霧咎むるやうに追ひ來るもなまめかしかる山歩きかな

運ばれぬ山の設けの粟の飯高千穂の嶺の神もませかし

朝山に唐芋の酒紹興の味ひすとてすすむるものか

羅の肱より下に雲の波つらなる山の朝ぼらけかな

霧島の山踏みをして仙女さび大方捨てつわが願ふこと

霧島をさして入り來し長き路見えずて牧の夏草光る

霧島は峰多くして蔭の色日向の色の山のかさなる

われ一人向ひの山に郭公の鳴くと頷くくらき浴室

鹽の湯の淺きところにはらばへる二人の女奔流と月

我が友の弱き涙の一しづく混りし後のさむき溫泉

霧島の山暴れの日の湯のぬるくおほけなけれど涙の如し

月日をばよそに雲湧く霧島の山にありとも告げずあらまし

夕まぐれ乾したる麻の衣たたむ山の哀れを我覺えつつ

山の臺對する海はさしおきて心惹かるる青蓬かな

霧島にあれど子等ある武藏野の家を忘れず都を忘る

霧島も霧の如くに時流れ昔の夢となりぬべきかな

悲しかる南洲の死も霧島に寢つつ思へば神話の如し

身の弱くいと哀れなる心にて後にしたる韓國が岳（以上）

櫻島曇らん日とてまた消えじ霧島が嶽見んよしも無し（再び鹿兒島にて）

燒石と變りはてたる島の身を柳の色に卷ける海かな（櫻島にて）

いと赤く大河のはての西海に入る日を見つつ我が涙おつ（川内にて）

串木野の村のはづれのわが車追ふ螢など忘れざらまし

昨日をば忘れはつべき心地して乘らでやみたる轟の船（宮の城にて）

美しき世盛り人に較ぶべき川の流るる西薩摩かな

天の川入來の麓市比野の糊著衣堅き夜にして（市比野溫泉にて三首）

闇廣く續ける中の市比野をさぐりて借れる草枕かな

大海の種子島より日印にして船來てふ八重山曇る

大海の甑の島の見え初めて冷たき風の通ふ川船（久見崎に遊ぶ四首）

我が胸に沖の甑の島と似て見えがくれする昨日の事

久見崎の後ろにありて降る雨に靑些かも變へざる入江

久見崎の沙の斜面を打ちし如打たざりし如晴れし雨かな

星と云ふ指を見るのみ空と云ふ髮を見るのみ夜のたをやめ

山腹の觀音堂と明星の向ひ合ひたるすずしきゆふべ

過りて病を得たり生れ來ていくそのことを過りて後

霜月や戀の積るに準へて衣かさぬる夜となりしかな

いにしへの匂ひ未來の香を放つ藥かがせよ我が胸迫る

柳の葉かりがね型に寢せ行きて思ひ死をば遂げんとすらん

ゆくりなく流れ合ひたるものながら沙に荒海布と勿告藻と抱く（以下鎌倉姥が谷にありし頃）

腰越へ向ふ車を見送りて寂し話を海人の繼げども

淺綠楓ひろがる下行けば沙こぼれくる化粧坂かな

行く春の香風園の廣庭の隈のみ多き夕月夜かな

大町の辻讀經をば二階にて聞く鎌倉の夕月夜かな

夜半近く海の館にかへり來て松のもと踏む鎌倉の春

煙草のむ料に荒海布の根を拾ふ島の僧都も爲給へるらん

海の月前の濱にて人死ぬとなど鎧戸を叩かざりけん

海の氣に亭の床几の潤へば戀し昨日の朝もむかしも

白き門死なん心の進むべき變に備へてかたく閉すらん

雨零れ襟に沁むこそをかしけれ海に向へる木戸開くとて

風烈し七里が濱の松山の松動くなり軍のやうに(以上)

崩れたる牡丹昨日の夕風のいかなりしかは我のみぞ知る

茅が崎は引潮時にかはづ鳴きいかに都の戀しかりけん(塔の死せし時)

呉竹を南の隅に植ゑしより片寄る春の夕風となる

かひなしや蘇生と云へる言葉には當らぬ我の夢の覺め際

大昔夏に雪降る日記など讀みて都をたのしめりわれ

我ならぬ己れをあまた持つことも魔の一人なる心地こそすれ

川上の河原の廣く寂しきに夕日の座さへその上にある

秋風に白く靡けり山國の淺間の、王の頂の髪(以下輕井澤にて)

下野の花上じろみ霧積の碓氷の坂に秋風ぞ吹く

飛行機を信濃の空の黒雲が隔つる朝の秋のはつかぜ

初秋の霧積山の石の亭六方の窓霧にふさがる

あかつきに馬悲しめり白露の厩の軒に散れるなるべし

七八日塵の外なる世にあれど改まらぬは誰の心ぞ

霧降れば白樺の木の梢なる遠山動くここちこそすれ

霧積が霧の帳をなかば上げ來よてふ如し輕井澤町

山の池濁る身ならば濁れかし勞ふごとし秋雨の中

女郎花蘆にまじれり縱横に湯川ながれて白き初秋

木がくれを淺間の湯川早く行く沓掛宿の盆の燈籠

溫泉を地に掘り出づる某の寶石の錐得んよしもがな

霧積の霧の使と逢ふほどに峠は秋のゆふぐれとなる

あけぼのをかつて知らざる裏山の雜木林の夕月夜かな（以上）

武藏野の家に歸れば菊の香の冷やかに立つ夕月夜かな

あなめでた櫻の紅葉赤き日に高御座置く土御門殿（今上の盛儀の折に五首）

第一の宣命降るあなかしこ人も草木も靡かざらめや

跪き君が御代をば祈るなり南殿の階は遙かなれども

菊咲くや乾坤ここにあたらしき大日本の豐秋にして

由紀の殿主基の宮居に夜をこめて祈り給ふも國民のため

わが踏みて落葉鳴るなり戀人の聞く音ならばをかしからまし

梅の花惱むけしきに匂ふ時人より先に我が涙落つ

いと白き梅の花かな男來て盜みがたかる心のやうに

山櫻その高くして眞白なる家は窓無し入りて仰げば（小金井にて）

軋みつつ釣瓶のやうに車行く黑部の溪の東雲の雪（以下宇奈月にて）

朝六時雪滑木を肩にする男女と入りし越の宇奈月

玳瑁の板の如くに流れたる黑部の川の見ゆる山かな

雪降れば黑部の奥は人跡を斷つと云ふなり天上の如

溫泉よし雪に卽して世も寒く心も寒く見る人と似ず

わが軒の氷柱の櫛のまばゆけれ朝日白馬の山越えて來て

降る雪も山も心も水色に偏よりて行く越のゆふぐれ

山山の上の半をかきくらし夕嵐立ち渓明きかな（以上）

海見ればさびし出島の和倉にて北陸道の盡くるならねど（和倉にて二首）

入海を圍む岬と島島が一つより無き櫓の音を聞く

家家に珊瑚のいろの格子立つ能登の七尾の禊川かな

風起り薄むらさきの波うごく春の初めの片山津かな

梵鐘のごと沙丘吹く風の鳴り柴山潟も夜は笛を吹く

櫛めきて細き丹塗りの格子より山代の湯の雨覗かまし

謙信の零銀河ほど長くして寒き御寺の方丈の廊（那谷寺にて）

戒保つわざ習はんと越路なる法の御山の白雪を分く（永平寺に詣づ）

窓近き紅茶の椀の上に散るものさへ越の白雪にして

事も無く鎌倉を經て逗子に著き斯くぞつぶやく「昔は昔」

思へらく千戸の封は得ずもあれ海見ん窓を一つ持たまし

穂芒や火事の明りの色を塗りあなづらはしき月上りきぬ

その昔伊東の族に靡きたる草木も枯れて黄なる一月（伊東にて）

あぢきなし我は類ひのありがちの物思ひゆゑ痩せはてしかな

さらさらと土間の中にも三鷹川浅く流るる島田屋の秋（深大寺にて）

むらさきの箒の草を掛けわたす小家に廻る水車かな

多摩川の船もてしたる普濟寺の古腰掛にあれば鐘鳴る

雑草は千萬行の文章も人に讀まれずうら枯れにけり

リラ匂ひ柳絮の飛ばば郷愁を習ふなるべし若き作者も（友を送る）

はかなしと云へば女の常の日の言葉と知りて人の咎めず

衰へし身とは夢にも思はれず苦しき毒を服しけるかな

神ませば机のやうに撫でて止む女體の山の頂の雪（筑波山にて）

桃浦に古船待てり乘るべきかいかに鹿島のことぶれも無し

芝山を桐あるかたへ下りて行く女犬ころ初夏の風（九如園にて）

女護の國島の遺風のをかしきやあると船先づ笛吹きて問ふ（以下八丈島に遊びて）

輕石尖り椿の木立ことやうに青き土用の八丈が島

一年におほよそ二百五十日涼しき雨のこぼれ來る島

旅人よ島の風土を盡くな訝りそとうぐひすの啼く

古き名を女護が島とも呼ばれたる五つの村の八丈音頭

旅人のあだし情を歎く歌他の歌よりも數まさる島

島の雨紅襷して樫立の若衆が出でて來る時も降る

島姫が膝を抱きて樫立のをとこ音頭を見る築土かな

大賀郷の廣場に据ゑて夕立を噺す太鼓は「女童」ぞ打つ

子が乘れる舟傾く八百萬神まさばとて安かるべしや

さばかりに島の緣をば斷つやうに我が船の笛鳴らであれかし（以上）

わが山の雨の中なる霧の塔幾つを建てて止まんとすらん（大垂水にて二首）

霧と云ふ白銀の魚尾を卷きて浮ぶ相模の廣き溪かな

顧て末は鉛の手ざはりに暮れつる年もなつかしきかな

何時となく思ひ上がれる我ならん君も仇も憎からぬかな

凋落は我が身の上になりぬると云ひ過ぎすなり思はざること

そのかみの火の涙など流れずておぼろおぼろに物思ひする

金澤や安房をめがけて人の飛ぶ檜の下の秋の白波（以下武藏の金澤にて）

初秋に浦ことごとく貝の巣になりはてぬらし乙艫干潟

己がじし心當りのあるやうに干潟を匍へる初秋の蟹

青銅の手觸りならぬものも無し北條寺の山門のなか

三角帆墨の氣多き海に居て片割月にならんとすらん

松山と海と同時に風立てば葛のかづらも船もあやふし

小波の甲高くしもなるままに乘り移りたる秋風の聲（以上）

我は泣くこれをば戀の黄昏のけしきと見做す人もあらまし

男來て夢まぼろしが育みし弱き心を覗かずもがな

青春の鬼に再び守らるる禁獄の身となるよしもがな

仄かなる霞を分けて鷹が峰光悅寺に入りし路かな

光悅の喫茶の則に從ひて散る櫻とも思ひけるかな

春霞何よりなるぞ桃櫻瀨戸の萬戸の陶器の窯（瀨戸にて）

富田屋の明き廣間と庭先と二方にある夜の櫻かな（大阪にて）

紅葉散る僧衣俗衣の隔て無く人は寂しき禪院の庭（圓覺寺にて三首）

薪とり菜摘み水汲み板敷に坐して得んもの戀にはあらず

流れをば傳ひ再び街道に立ちて御寺の松風を聞く

落葉よりいささか起る夕風の誘ふ涙は人見ずもがな

高高と山の續くはめでたけれ海さばかりに波立つべしや（丹後にて）

別れ來し因幡の丘の防風を嚙めば涙の味もこそすれ

自らを五月の山の精としも思ふ卯つ木は思はせておけ

湖を消しはてんとは思はねど假に埋むる初夏の雨（宍道湖にて）

大山寺笹のいく葉の隱岐見えて伯耆の海の美しきかな（以下伯耆にて）

普明院書院の障子甸ひありくおほよそ隱岐の島ほどの蟻

元弘の安養の宮ましたりし御寺の檐に葺くあやめかな

安養寺齒形の栗をたぐひなき貴女の形見に數へずもがな

みくりやの濱より上りましたりし貴人の如き山の雪かな（以上）

武藏野の時雨青渭の湖をかくの如くにむかし越えけん

箒草雉の女鳥の姿してかかれる軒を濡らす雨かな

金澤の文庫の窓のうつれるを翡翠眺めて飛ばぬ池かな（再び稱名寺を訪れて）

山房の若き楓を誘ひて共に靡ける海の靄かな（鎌倉の冬柏山房にて）

我が友の椿の城を立ち出でて葉山に至る春の夕ぐれ

海なかば苔の如くに滑らかに覆へる春の雲の影かな（葉山にて四首）

阿修羅在大海邊と云ふことも思ふ長者が崎の雨かな

海よりも空の白くてそれよりも風の白かり葉山荒るる日

ホテルなる小松の垣よ嵐など防がんとせで逃げて來よかし

唐傘の下の明りに四つづみと櫨の紅葉の見ゆる路かな

己れより百年ばかり放たざる君が心と云ふよしもがな

たかむらを躍り越えんとする落葉嵐の馬の御し易からず

瓜哇のサラ印度のサボテ幸ひも斯くの如くに海越えて來よ

動くもの鴨と一つの船とあり芒は遠し雲は遙けし（伊豆の吉田の大池にて）

なつかしき函館に來て手に撫づる亡き啄木の草稿の塵（以下北海道に遊びて）

旅人となり初夏の霧を浴ぶ青森の朝函館の畫

橄欖の實の色をして霧を踏み雲を被ける駒が嶽かな

後志の雪解の後の濁流の溢るる川も十あまり越ゆ

根を持てば濁流が描く渦卷をこれは描きえで水漬ける木かな

高山の長き斜面を降る間に日の暮れて行く後志の國

ひとすぢの一萬二千幾尺の防波堤をば越ゆる白波

船馳せて防波堤にも近づけば高島見ゆれ忍路は見えず

我の乘り橇形の馬車練り行くは小樽本町色内の町

五月なほ燕還らぬ石狩の溫泉の町に山鴉啼く（定山溪にて）

亡き人の札幌と云ふ心にて降りし驛とも人に知らるな

札幌に石狩山の村雨のつづきを聞ける夜の机かな

辛夷咲く北海道の石狩の奥に移れるわが旅路かな

くれなゐの若芽桂の立ち竝び山醉ふ如し石狩の奥

大衆が肩をならべて來るごとき石狩川の水上の波

美しく弓引く如く上げし手に撫でずもがもな刺青の口（アイヌ）

千年經て變らぬものも悲しけれ蝦夷のアイヌを云ふにあらねど

登別花と若葉の差し交す枝に紛れて雨もこそ降れ

北海のくにぐにの人十三の湯槽に浴ぶる登別かな

異れる世界の門を登別くぐり入りこし心地こそすれ

隼が洞爺の湖の中島の若葉のうへに遊ぶ初夏

古蝦夷のマツカリヌプリ落日の光を浴びて立つ湖上かな

函館へ奥の蝦夷より歸り來て買ふ嬉しさよ鈴蘭の束

夜の十時ホテルに歸り思へらく錦のごとし函館の船

北海の青き入江になぐさまず涙流るるたちまちの崎

海峽の船にまたあり五月より六月となり歸り路となり（以上）

夢ぞともはた雲ぞとも戀ぞとも云はん若葉す奥の中山（蹄途）

山の青水の青愛づ羅馬よりコモの湖畔に來し身の如く（鳳雲閣に宿りて三首）

山に見る逗子の灯火夥し光る沙とも云ひぬべきかな

花畑に松の林にあしたより雨徘徊す比露の山莊

僧俗の杉の間を行きかへる高野に白し夏の夜の月（高野にて四首）

東塔の炎上のあと悲しけれ伏家のあとと變り無ければ

永劫の世は時も無しみな青し弘仁の苔慶長の苔

寶藏の窓の明りのおぼつかな鳥羽の后の雜阿含經

松の外一草も無きふるさとの高師の濱に踏めるしら沙

松原はひとなき夜半を窺ひてとりぞ出でたる金簪の月

敎坊の樂と脂粉の香の混る夏の夕に逢へるものかな（大阪にて三首）

ひとしけれ玉勇の舞御佛の高野の山にわが聞きし鐘

清きにも由らず濁れることにまた由らず戀しき大阪の水

生田川白く長きと炎天と相もむかひて何となるべき

蟋蟀の告ぐる心を露臺にて旅の女が過たず聞く（六甲山天海庵にて二首）

いただきに秋の靡きて羅の人逍遙す武庫の西山

溪に咲くをとこへしぞと我が云へど信ぜぬ人を秋風の打つ（以下法師温泉に遊びて）

川向ひ權現道ははやく消えその後に咲く月見草かな

山風の切にさびしき明方に三國峠の道を人聞く

わが昨日摘みし狐の茶ぶくろは萎え蛾の死に山風ぞ吹く

その下を三國へ上る人通ひ汗取りどもを乾す屋廊かな

山の朝竝びてくらし樅の木のもつとも下の枝と庇と

訪ねたる永井本陣戸を開き明りを呼べばかよふ秋風

峠より雨の濁流つたひきて永井本陣あはれなる秋

山涼し少しはすはに裾あげて赤つち坂を踏める夕立

山の湯に木天蓼の實をわれ嚙みてことの外なる秋と思はず

こころみに都女を誘へりと霧の云ふべき山のさまかな

おくやまの銀龍花とておもひ草若紫をうしなひて咲く

三國越え越後の秋に近づきて霧我を吹き風山を吹く（以上）

百斤の櫻の花の溜りたる伊豆のホテルの車寄せかな

ほととぎす疎らに鳴けり朝五時に淺間の煙中天を突き

德島の藍場の濱の蓮藏と新町橋を秋風ぞ吹く

雲遊ぶ空と小島のある海と二つに分けて見るべくもなし（讃岐にて四首）

雲うごく讃岐の院の御車の都にかへるものならずして

なほいまだ人に隱れてゐたまふや群山見えて白峰あらず

讃岐路のあやの松山白峰に君ましませばあやにかしこし

秋風や空海法師幼くて見たる讃岐の碧瑠璃の空（善通寺にて）

伊豫路より秋の夕ぐれ踏みに來ぬ阿波の吉野の川上の橋

美しき秋の木の葉のここちして島の浮べる伊豫の海かな

春寒しいまだ南の港にて復活祭を燕待つらん

風立てば錦の如しをさまれば螺鈿のごとし一本ざくら

いと親し疎しこの世に我住まずなりなん後も靑からん空

子の摘みし武藏野蓬紫の根はまじらねど手に取りて嗅ぐ

子の顏に添ふまぼろしもはた白し遠き海牙の堀割の橋

霧積の泡盛草のおもかげの見ゆれど既にうち枯れぬらん

木枯す妄語戒など聞く如く君とかたらずなりにけるかな

もろもろの落葉を追ひて桐走しる市川流の「暫」のごと

二荒山雲を放たず日も零れ雨も零るる戰場が原（日光にて三首）

中禪寺立木佛の千の手のゆびさすところことごとく霧

おしろいの水の流るるやうなれど是は二荒をおぼひ行く霧

伊香保にて昔を少し思ふ時赤城の山の動き來るかな（伊香保にて二首）

麻雀の牌の象牙の厚さほど山の椿の葉につもる雪

四方より櫻の白き光射す總の御牧の朝ぼらけかな（三里塚にて）

下總の印幡の沼に添ふ驛へ汽車の入る時散る櫻かな

放ちなば千里の野にも馳せぬべき牡丹の花と思ひけるかな

初蛙淡路島ほど盛り上がる楓のもとに鳴くゆふべかな

落椿島の少女が小柄なる驢の口とりて行く路に敷く（大島に遊びて三首）

山さくら所の名さへ假名の外文字無き島に生ひて花咲く

大島の波浮の渡しを行き返りして靜かなる春の夕ぐれ

月出でて豐より反りしこちすれ鈴蟲の鳴く三津の裏山

粉の樣に李の花は白く散り鶯啼けり山火事の時（上州水上にて）

雲ぞ降る人磨くべき要無きか越の平の白玉の山（湯澤にて）

掌に峠の雪を盛りて知る涙が濡らす冷たさならず（十國峠にて）

山の手の海藏寺にてわが船を見る人無きかユウカリの外（熱海を出でて）

我せめて長生の湯にあるほどはかなしごとを思はずもがな（伊東の長生莊にて）

雨降れど小室の蓬青めれば山莊の馬山羊寒からず（吉田の拋書山莊にて三首）

爐のほとり寵われ敷く虎に在る羚羊に在る山莊の客

小室山黑髮の夜となりにけり雨は梅花の油なりけん

斷崖に門あり樓を假這ひ天上天下知り難きかな（熱海の藤原別墅にて二首）

俱忘軒百歩はなれて我いまだ世事を思はず櫻散り敷く

鹽田に隣れる町の夏の夜の炎暑の中の山ほととぎす（備前の味野にて）

石は皆砒素を服せる色にして河原寂しき山の曉（上野原に二首）

朝日射す河原は低く煤いろの水晶張りて川盛り上がる

蟬鳴くや港の圓の片端に水雷母艦留れる午（磯子にて）

高原の夏草に居て皆黑し豐後の牛も豐後の蝶も（久住にて）

穴藏の芹川の湯の窓に乘り白き鷄鳴く山の東雲（湯原温泉にて）

湖水より三河の椽に誘はれて行く花藻ある由布の川かな（由布院にて三首）

由布院の辻湯硫黄の香を立てて硫黄に染みぬ櫛形の月

かがり火の煙ななめす夕月を福間の奥に吹き放つべく

粘土なる法師の地獄ふつふつと湧き立つ上の初秋の雨（別府にて）

牛の群彼等生くれど爭ひを知らず食めるは大阿蘇の草

天草の西高濱の白き磯江蘇省より秋風ぞ吹く（天草にて三首）

天草の白鶴濱のたそがれのしら沙が持つ初秋の熱

巴濱巴の上に巴置く岬、松原、溫泉が獄

大文字も出雲路橋を行く人も松の堤も冷たき月夜（京にて）

いつまでもこの世秋にて萩を折り芒を採りて山を行かまし（また拋書山莊にて三首）

たそがれに木犀の香はひろがれどいまだつつまし山の端の月

うつる灯は琥珀の柱水晶の楯のやうなる水底の月

秋寒し旅の女は爐に滯み甲斐の溪にて水晶の瘦せ（また精進湖に宿りて六首）

わが向ふ爐のおもてのみ赤くして爲すすべ知らず滿山の闇

山の雨湖水も山毛欅もしづかなりホテルの瓦音立つれども

鵜の崎の時雨に寢ねてしののめの露を踏むなり湖の岸

雲として遊ばず小き人の身の煩はしきをもて仰ぐ富士

立ち別れ岬に見れば我友の船痩せて行くここちこそすれ

我のみが得し陸の手のことちして船より上る細き棧橋

吊橋を二つ渡ればこと移り世古の溫泉の黄のもみぢ散る（湯ヶ島にて五首）

落葉踏み時雨に逢ひて忽ちに天城の夜とはなりにけるかな

音高し山をおそへる暗闇が川に混りて鳴れるならまし

紫の靄の中より川二つはしり寄りくるあけぼのの家

移り行く早瀬の紋を一人見る狩野の川邊の椎が本かな

梅に住む羅浮の仙女も見たりしと君を人云ふ何事ならん（夫の六十の賀に三首）

明王の劍邪をやぶるとよたぐひしぬべし我が梅の花

我が梅の盛りめでたし草紙なる二條の院の紅梅のごと

梅咲けば蕪村思ほゆその人が唐の詩人を思ひしごとく

自在觀その岩山の片端に坊ありて借る草枕かな（甲斐の御嶽にて）

秋風や船、防波堤、安房の山皆いたましく離れてぞ立つ（横濱にて）

菊の香やまさしく秋の夕なり白蘭の閨も牡丹の室も（同じ處の飯店にて）

行く秋の吳羽の丘の櫻の葉赤きを踏めど山み雪降る（越中にて三首）

國司にて大伴朝臣せしごとく氷見見有磯見吳羽山行く

大きなる杉を傳ひて舌打ちす百舌のたぐひの秋の雨かな

白山に天の雪あり醫王山次ぎて戸室も酣の秋（加賀にて二首）

美しき陶器の獅子顔上げて安宅の關の松風を聞く

思へらく尼清心も猪も今は佛のみ弟子ならまし（竜攝寺にて）

いと寒し崑崙山に降る如し病めば我がある那須野の雪も（那須に病みて三首）

那須野原吹雪ぞ渡る、わが上をそれより寒き運命渡る

雪積る水晶宮に死ぬことと寒き炬燵となど竝ぶらん

加茂川を上る潮のみ悲みて唖し長狹の春の夕暮（東安房にて）

足駄して須雲の川の吊橋を渡る函根の春の夕暮

誓ふべし山の祕密を守るべし蛾よわが路に寄り來る勿れ（以下鹽原にて）

馬やれば山梨えごの白花も黄昏時は甘き香ぞする

鹽原の御料の山に夕霧の加はる時も鳴く河鹿かな

心經を習ひ損ねし箒川夜のかしましき枕上かな

五月の夜石舟にねて思へらく湯の大神の縛を受く

峯峯の胡粉の櫻剝落に傾く渓の雨の朝かな（以上）

ほととぎす妄りに鳴かず一章を讀み終へて後一章を次ぐ（伊豆にて三首）

えごの花ひと時に散り白塔の毀たれしにも似る林かな

山に居て夕の衣重ぬれば二三の人に文書かまほし

湯坂より一人湯本に我歸り藥飲むなり山ほととぎす（箱根にて）

わが路の白樺の木の幼きは乳の香放つ心地こそすれ（以下赤城山にて）

白樺に我も位すかたはらを飛ぶは赤城の頂の霧

わが立つは枕の草子木を書けるなかにまじらぬ深山木の下

夕立や牧場の口に較ぶれば小馬ばかりの青木屋の門

上つ毛の大沼の姫の山に入り霧白き日に聞く水鶏かな

小波に下野草のまじるごと赤しゆふべの山のみづうみ

藥師山霧に化りて我が岸の板屋楓が藥師に化る

山の霧炎なりせば如何ならん白き世とのみ見て許せども

黒檜をば覆したるものありて湖水大洞霧に埋まる（以上）

夜の涼し枕上より吹き出でて百里に及ぶ妙高の風（また赤倉にて六首）

越信濃何れが上に重なると知らねど山の續きたるかな

妙高も松蟲草を手にしたる我もこれより北海に向く

赤倉の草の斜面に大和なる三笠の山とおなじ日當る

溪も無く溝も與へぬ山水が亂麻の如く犯す路かな

驛二つ裾野の汽車は越えつれど山の螢は飛ぶを急がず

御堂より高かる空に五山浮き松風の鳴る廣業寺かな（また上林にて五首）

消ゆるにも現はるるにも大いなる山が用ふる神仙の術

上林み寺の禪尼放膽に物は云へども知らず山の名

もろもろのめでたき山を掻き消して熊の膽のごと苦し夜の色

一天を拭ひ去りけれ北信濃咨野の山の秋近き風

比加根山秋風吹けど富士晴れず據なく靡く草かな（十國峠にて）

戀のごと舊恩のごと身にしむと月の光を思ふ秋かな

武藏野の風の涼しき夜とならん登場したり文三と月と

永久と消えゆく水の白波を一つのことと思はるべしや（以下また四萬に遊びて）

四萬の夜の新湯の川の外の家など惡しからん秋の灯を置く

蛾の多し棗を蛾に變へて放ちたる深山木あらん山の夜寒に

星も來よ月も入れんと四萬の空東の山を褄形に裁つ

ある山はますほの芒ほどに染みまた女郎花めく紅葉かな

川東中井の里は五十度の傾斜に家し爪彈きぞする

障子をば蝙蝠ほどの蛾の打てる九月の末の山にわれ寢る

川の幅山の高さを色ならぬ色の分けたる四萬の闇かな

人間に灯の兒まほしき欲ありと廊を踏みつつ知れる山の夜（以上）

あまたある洲に一つづつ水色の越の山乘る信濃川かな（長岡にて）

はてもなき蒲原の野に紫の蝙蝠のごとある彌彥かな

草枯れて船江の沙丘冷たかり靈きんとするや北國の秋（新潟にて六首）

堀川の柳の路を車行き雁を思ひぬ數知らぬ橋

朝市に銀杏の實など得て越えぬ柳をかづく新潟の橋

大きなる護岸工事の板石の傾く上に乘れる靑潮

笛の音立てて本州第一の川を斜めに佐渡丸が切る

二つ立つ新潟の塔何事を北の海より問かんとすらん

承久に圓位法師は世にあらず圓位を召さず眞野の山陵（また佐渡に遊びて三首）

浦幾つ村幾つ越え外海府潮の煙にわが路曇る

船にしてはてなき海を行くよりも寂し海府に波を見ること

山行きてこぼれし朴の掌に露置く刻となりにけるかな(また上州水上にて二首)

月出でん湯檜曾の渓を封じたる闇の仄かにほぐれ行くかな

空の色赤く匂へる夕にも怒をふくむ冬木立かな

正忠を戀の猛者ぞと友のいふ戒むる如そそのかす如

東京の裏側にのみある月と覺えて淡く寒く缺けたる

十二月今年の底に身を置きて人寒けれど椿花咲く

家家が繼ぎ合はされず寒げなる形に立てる武藏野の冬

夕明り葉無き木立が行く馬の脚と見えつつ風渡るかな

僧俗のいまだ悟らず悟りなばすさまじからん禪堂の床(また圓覺寺にて)

み神樂を征夷將軍ならずしてわが奉る鶴が岡かな(鎌倉にて六首)

拜殿の百歩の地にて末の世は汕煙をあぐる甘栗の鍋

初春に乘る鎌倉の馬車遲し今年の月日これに似よかし

桑の葉の重なる海に數知らぬ蠶となりて日の寢たるかな

沙川は大方しみて海に出づ外へ流るるわが涙ほど

正月の五日大方人去りて海のホテルの廊長くなる

池水を神居古潭として咲ける水口園の蝦夷櫻かな(熱海にて四首)

溫泉の靄塗るほどに塗るほどに曇りけらしな大空の壁

十字架の受難に近き島と見ゆ上は黑雲海は晦冥

雨暗し棄てたる靴の心地して島いたましく海に在るかな

半島の山集りて霞めるを見つつ我越ゆ船原峠（以下伊豆に遊びて）

岬どもさぼてんの葉と海に見え下に小土肥の村ある峠

わが前に仁科の海の堂が内清く曇りて雨もこそ降れ

堂が島天窓洞の天窓を光りて降だる春の雨かな

竹茂り流に添ひて梅立てる婆娑羅峠もなほ雨に越ゆ

海青き伊豆の下田に青からず大横町の春雨の泥

白濱の沙に上りて五百重波暫し遊ぶを逐ふことと勿れ

少女子が呼び集めたるもののごと白濱にある春の波かな

潮鳴るや今井の濱に小雨降り天暗くして清きしののめ（以上）

冬の巻

冬の卷は秋の卷の續きであるが、ただここでは作者が晩年寡婦となられた昭和十年春より歿年までの七年間の作五千餘首から六百二十餘首を選んで之を作った。而して前者との著しい相違は作者の心境である。秋の卷で示された平靜、穩和、澄明、高雅等の詩境は、忽然として一生の伴侶を喪つた大悲哀の爲に一轉し再轉し、乃ち冬の卷獨自の哀調を成立させたのであるが、如斯して波瀾の多かつた、質量共に殆ど比類を知らぬ偉大な一生の制作は終了したのである。

青空のもとに楓のひろがりて君亡き夏の初まれるかな

わが机地下八尺に置かねども雨暗く降り蕭やかに打つ

一人にて負へる宇宙の重さよりにじむ涙の心地こそすれ

君が行く天路に入らぬものなれば長きかひなし武藏野の路

魂は失せ魄滅びずと道敎に云ふごと魄の歸りこよかし

いつとても歸り來給ふ用意ある心を抱き老いて死ぬらん

哀れなり妻と子等より君去りて訪ふ日無く見給ふ期無し

備りぬ奈良の佛は金を塗り君は塗らねど端嚴の相

君なくて憐むべしと云ふ勿れ師が衣鉢をば傳へたる弟子
妙高も淺間の山も壇として祭らん君を多磨の野に置く
心なる悲しみの花千枝白し世は淺みどりくれなゐにして
阿佐が谷の近江博士の許へ行く服喪の人も藥を得べく
生くる世の業報のうちさるもののありや敎へよ涙の地獄
ありし日と今日を合せて世と云はばうら懷しく脈はしきかな
掌に掌を置くくちびるに末期の水を參れるのちも
亡き魄の龕と思へる書齋さへ田舍の客の取り散らすかな
業成ると云はば云ふべき子は三人他はいかさまにならんとすらん
我死なず事は一切顚倒す悲しむべしと歎きしは亡し

在し在さず定かならずも我思ひ人は主人の無しとする家
人の世に君歸らずば堪へ難し斯かる日既に三十五日
歡びとしつる旅ゆゑ病得て旅せじと云ひせずなりにけり
茫茫と吉田の大人に過去の見え共れよりも濃く我に現る（吉田學軒先生なり）
睡げにも目を閉ぢたりし後なれば醒むべき君に云ふこと積る
あさましや南の伊豆にことほぎし君が六十三春かこれ
源氏をば一人となりて後に書く紫女年若く我は然らず
寂しけれ生死の差より大いなるその世と今日のわが變り樣
一人出で一人歸りて夜の泣かる都の西の杉並の町
街道のとり除けらるる杉の木を君が移せる采花莊これ

君を見し夢の話も自らに語る外なき朝つづくかな

悲しみが損ふことを何ならず思へる身とは人知らずあれ

移り住み寂しとしたる武藏野に一人ある日となりにけるかな

萬物の榮枯を知らぬ身のやうに我一人をば歎かれぞする

書き入れをする鉛筆の幽かなる音を聞きつつ眠る夜もがな

二人にて常世の春を作れりと我なほ半思はるるかな

うづだかき若葉を見れど武藏野の赤風通ふ塚のうしろに

病して鶯峴臺に上らねば君も上らで終りけるかな

思ひ出は尺とり蟲がするやうに克明ならず過現無差別

亡き後の哀れの中に思ひやる佐渡に一人の蹲る弟子

旅はせじ海も淺葱の羽二重を著て目を閉ぢし君に見えまし

亡き人の古き消息人見せぬ多少は戀に渡りたる文

山山を若葉包めり世にあらば君が初夏我の初夏（以下箱根にて）

山に來てこよなく心慰めば慰むままに戀しきも君

湖の船より上る群れあれど尋ね出ださん君ならぬかな

物の怪に煩ふほどの我身にてあらましものを箱根路の夏

舊態を變へねば苦し湖畔には山椒の魚を連ねてぞ賣る

强靭にて蘆の湖見難きと見難くなりし君と異なる

病む母を送り來りて傍らに二夜子の寢る山の初夏

木の間をば登山電車の走せ去るも死の速力に比べられつつ

人傳に都へすべき便り無しただ病のみ宜しとも云へ

紫の乾くやうにもあせて行く箱根の藤に今は似なまし

君亡きは氣の迷ひかと次次に迷ひの深くなり行く夕

足柄の山氣に深く包まれてほととぎすにも身を變へてまし

許されん願ひなりせば君が死をせめて未來に置きて恐れん

宮の下車の夫人おしろいを購ひ給ふさることもしき

山山が顏そむけたる心地すれ無慘に見ゆる己れなるべし

後より我を追ひくる悲しさよ雫を含む毛欅の夕風

ほととぎす明星嶽によりて鳴く姿あらねどさばかりはよし

ほととぎす雨山莊を降りめぐる夜もまた次の曉も啼く

ゆくりなく君を奪はれ天地も恨めしけれど山籠りする

足柄の五月の霧の香に咽ぶ君あらぬ後杜鵑とわれと

哀れなり拾ひ行かんとほととぎす我が上に鳴く山の臺かな

ほととぎす山に單衣を著れば鳴く何を著たらば君の歸へらん

ほととぎす虎杖の莖まだ鳥の脚ほど細き奥箱根かな

人間の惑ひを解くと信じたる法師のごとく黑鶫鳴く

山の湯に君が脫ぎたる衣無くて寂しと不如歸見る儘を云へ

山暗し灯の多かりし湯本とてはた都とてかひあるべしや

見出でたる古文によりやるせなく君の戀しき山の朝夕（以上）

北海のただならぬかな漲ると云ふことと信濃川ばかりかは（寺泊にて四首）

寺泊馬市すてふ海を越え佐渡に渡さん駒はあらぬか

我一人寺泊より流されん身となるもよし君生きたらば

良寛が字に似る雨と見てあればよさのひろしと云ふ假名も書く

笹川の流と云ふに從ひて遠く行くとも君知らざらん（車中にて二首）

遠く來ぬ越の海府の磯盡きて鼠が關見え海水曇る

我が借れる湯治座敷も窓あれど暗し出羽の山の五月雨（溫海溫泉にて）

鎌倉の除夜の鐘をば、生きて聞き死にて君聞く五月雨の鐘

山寺に五十六億萬年を待てと敎へて鳴りやめる鐘

我が見るは由比が沙濱悲みにくれて曇れる鎌倉の海

筑摩、伊那、安曇の上に雲赤し諏訪、蓼科は立縞の雨（以下信濃に遊びて）

八が嶽負ひたる原に露繁しはかなきものと云ひ離きまで

君がためまたも信濃に山岳の壽を羨みて起き臥しぞする

荷を積める車止まり輕袗の子の歩み行く夕月夜かな

西廂に蓼科おろしさやめけば忽ち秋の到れる如し

山の霧寂滅爲樂としも云ふ鐘の聲をば姿もて告ぐ

都より山の恩をば得んと來て朝は疾く起き夜を遲く寢る

蓼科に山と人との和を未だ得ぬにもあらで物をこそ思へ

暗き灯を賴りて書けば蓼科も姨捨山の心地こそすれ

守屋嶽雪したる見て留りし日に何事も異れるかな

我にのみ吾嬬川を渡る日の廻り來れども君與らず（以上）

わが溫泉斷崖に立ち走り湯は渚に續き秋の風吹く（伊豆山にて）

もろともに引き助けつつこの山を越え行く蟲の夜の聲と聞く（吉濱にて五首）

山裾に汽車通ひ初めもろもろの蟬洗濯を初めけるかも

裏山に歸らぬ夏を呼ぶ聲の侮りがたしあきらめぬ蟬

松山の奥に箱根のむらさきの山の浮べる秋の曉

秋草も西洋花もかづきたる下足柄の重き白露

伊豆の月黃燈のごと薄く照り蟲鳴く山に涙流るる（吉田にて四首）

夢路より覺めて歸へらん君を待つとところにかなふ伊豆の山莊

湖は月の質にて秋の夜の月を湖沼の質とこそ思へ

山疊る一語昔に及ぶこと聞きて心の亂るるごとく

おくつきは野兎なども潛むほどうつろに崩えてやまぬ雨かな

佛前に家刀自がすることをして君笑はんと思ひけるかな

秋風の創痕のなほ新たなる大地に二十日止まぬ雨かな

鈴鹿より膽吹に及ぶ山脈の盛んなるにも讓らぬ稻穗（尾張の津島町にて）

入海の竹島の橋踏むことを試みぬべき秋の曉（浦郡にて二首）

遠き世も見んと我して上層の部屋を借れると人思ふらん

ことさらに濱名の橋の上をのみ一人渡るにあらずども我

冬の夜の星君なりき一つをば云ふにはあらず盡く皆

人來り塚の椿のこと云ひぬ伊豆の話にあらぬ寂しさ

蟬なども四布の蒲團に卷かれつつ冬眠すらん武藏野の土

筆とりて木枯しの夜も向ひ居き木枯しの夜も今一人書く

思ひ出にあらずあらゆる來し方の中より心いたまぬを採る

君知らで終りぬ斯かる悲みも斯かる涙も斯かる寒さも

家家が白菊をもて葬くやうに月幸ひす一村の上

鹿の來て女院を泣かせまつりたる日の如くにも積れる落葉

君が死の姿と見れど冬枯のまま武藏野のあるにもあらず

武藏野の落葉に酒を温めん那覇の都のみやびをの爲め

我が手をば落葉燒く火にさしのべて恥ぢぬ師走の山歩きかな

伊豆山の相模屋口の石段を昨日の爲めに通ばずもがな（伊豆山にて三首）

初春の大湯の廊を往來して物思ふ人いくばくかある

靄のぼる千人風呂を窺へり海のあさかぜ廊には已れ

山莊に君殘す筆悲しくも老いて遊べる趣を書く（以下三津の五松山莊にて）

黃なる色いと暖し日の射して枯萱厚き三津の裏山

白玉の涙流れぬ旅に來て春の始に我悲しめば

都邊の松の內をば憚りて出でて愁ふる五松山莊

山莊の岳陽樓の階を踏む現心もなほあればこそ

山の上含雪亭の土間の爐の煙も君もあとかたの無し

枯萱の天城おろしに怯まぬを隣にしたる梅の花かな

莊のもと路長く見ゆ廻國を最明寺殿したまふも見ん

帛紗打春の鼓の音ぞ立つ爐邊の主人「や」と云はねども（以上）

かへらざる世を悲しめば如月の磯邊の雪も度を越えて降る（大磯にて六首）

大磯の追儺の男豆打てば脇役が云ふ「ごもつともなり」

豆を蒔き壽詞申せり我身にはおくればせなる厄拂ひかな

海人の街雪過ちて尺積むと出でて云はざる女房も無し

この磯の一つの島百羽ほど君と見つるは鎌倉島

東京の吹雪の報の至れども君が住む世のことにもあらず

雪被り尼の姿を作るとも山の愁ひは限りあらまし（湯本にて二首）

月明し溫泉町の騒音も拭ひ去りたるしら雪のうへ

氷より偶ま大魚釣られたり榛名の山の頂の春（以下伊香保にて）

我が背子を納めし墓の石に似てあまたは踏まず湖水の氷

盡きもせぬ昔の夢に胸いたし血の涙ほど赤き溫泉

地の上に愁ひを呼ばぬ所なし何の季節か樂しましめん

伊香保山雨に千明の傘さして行けども時の歸るものかは

靄上り身を浮城に置く如き朝は君もある心地する

我が世をば恣には悲しまぬ苦行を負ひて旅もこそすれ（以上）

山深き奥に如意輪おはしまし櫻がちなる鐵舟寺かな

忽ちに明治三十四五年の世の歸り來て不覺にも泣く（靜岡にて濱原有明先生に逢ふ）

掌へ通草の花の房を載せ歩みぬありし春に準へ（また吉濱にて）

尼達の觀音經に紛れつつ雨の濡らせる赤松の幹（多磨にて）

寒からず暖からず梅白し鎌倉山の圓覺禪寺（一周忌に四首）

漸くにこの世かかりと我知りて冬柏院に香たてまつる

悲しみのまた立ち返り所をば所とせざる聽聞の席

鎌倉のうぐひすぞ鳴く賜はりて甘し御寺の菜根の齋食

外海の波を勝場の江に運ぶ風立ち初めて散る櫻かな（上總の鵜原にて二首）

松の花鞭を當てなば金色の雲たちまちに被はん岬

草花など子の採りにこん武庫山の路に涙を流さずもがな（六甲にて四首）

大阪の煙霞及ばず中空に金剛山の浮かぶ初夏

狭霧より離住吉の灯を求め求め難きは求めざるかな

山の爐に七八本の榾燃えて龍男の顔に咲く牡丹かな

菁莪の花鞍馬法師は塵と云ふものかからんと眺めてあらん（鞍馬にて五首）

僧正は山の小鳥の性質を祥瑞坊を云ふごとく云ふ

美しと見て過ぎ難し内殿の奥の不斷の法の灯火

菁莪の花鞍馬の聖山を出づ薄雪ならば哀れならまし

義經堂をんな祈れり陸奥の高館に君ありと告げまし

一度は汽笛のやうに悲みを吹かしめよとも願ふ初夏

濱どうが沙を掩へる上に撒き鰯乾さるる三保の浦かな

田の螢星も眞崎の燈臺も露をまねびて光らぬは無し（鐵舟寺にて二首）

鐵舟寺老師の麻の腰に來ておどろくやうに消え入る螢

西すれば三河に入るが如長く北は木曾路に入る如き廊（奥山方廣寺にて六首）

大般若轉讀をする勤行に爭ひて降る山の雨かな

似ぬ如し俗の無言と御寺なる出離の人の云はざる行と

雨の日となりて水月道場の人にも近くなる心かな

山の雨半僧坊の權現の白くゆゆしき羽團扇の紋

奥山の白銀の氣が堂塔を普く閉す朝ぼらけかな

名を聞きて王朝の貴女ときめきし引佐細江も氣賀の町裏（濱名湖にて三首）

夕暮の湖沼の氣もて消されたる山にあらねば君今朝も無し

禪寺より宿りを移し憚らず身を悲しめば濁るみづうみ

ほととぎす刀のやうに立枯れて白樺寒し山の八月（上河内にて）

盆の唄「死んだ奥様を櫓に乘せて」君をば何の乘せて來らん（淺間溫泉にて二首）

白雲に漂ふ蘆の葉に似れど疑ひもなき乘鞍が嶽

秋の風枯れて行くなる已れには野山の草のならはずもがな

湖の深きところに大同の世の夢を見る十六箇村（猪苗代の長濱にて四首）

白河の關の外なる湖の秋の月夜となりにけるかな

精靈のごと白き船みづうみに月の照して秋の風吹く

大船も沖を過ぐべき朝のごと霧立ち渡る岩代の湖

秋の水次ぎの湖沼へ移るとて薄の原に鳴れる奥山（裏磐梯にて三首）

後ろにも湖水を前にせざるものあらざる草の早くうら枯る

某の蝶の羽がもつ青の外ある色ならぬ山のみづうみ

城外の湯の東山しのばれぬ戊辰の秋も我がいにしへも

白虎隊屠腹の山の悲みは羅馬の塔もなぐさめぬかな

多磨の野の幽室に君横たはり我は信濃を悲みて行く（以下軽井澤にて）

離山淺間が嶽に拘らず立てど等しく草枯れにけり

信濃にて旅の初めの覺悟には戻る涙の零れこそすれ

水色の角とも身とも定まらぬ異形の妙義碓氷の紅葉

色づきて今は一草一木も蔑すべからず北の信州

山川は流れ流れて大海へ落葉奈落へ去なんとすらん

我が踏みて荒法師など思はるる朴の落葉の音の立て様

落葉松の落葉を敷かぬ路も無し牧の栗毛の刈り毛のやうに

紅葉しぬ北の信濃の亡き人の曾遊の林、高原、峠

秋深しこの日も栗鼠のふるまひを盗み見すなり落葉松林

危さは三笠湯川の吊橋と異らぬ世に殘されて生く

山風やよみがへらでもありぬべきほほけ芒の鳴りもこそすれ

白露を踏み村雨に人濡るる信濃の山の贖罪の則

山莊の炬燵の間にて信濃路の初雪もまた待たんとすらん

今あらば君が片頬も染めぬべく山莊の爐の火の燃ゆる時

その廣葉煩はしとも云ふやうに落とせる朴も悲しきならん

雨去りてまた水の音顯るる靜なる世の山の秋かな（以上）

木の葉舞ふ足柄山に入りぬべく我またも出づ都の外に

明星の山頼むごと訪ねきて積る木の葉の傍らに寢る（箱根にて三首）

山莊の木の葉叢の如く散り風の休めば平穩に散る

箱根路に曾我滿仲の墓ならで我は形の無き塚を見る

東の間か長き千秋か病みて倚る片瀬の驛の木の椅子の上（旅に病みて六首）

大事とは病をせねど我があるは海の驛亭風寒く吹く

捨てつべく海人の船にも托されず友の助けて鎌倉に入る

ほのぼのと消え入りしもの歸り來ぬ命と云ふはこれにかあらん

昔をば思ふ心のいつとなくあるべき後を描けると似る

幻の寄り添ふ君を現にてなど東の間も見難きならん

松を打つ忙はしげの時雨かな逗子とも知らず過ぐるならめど

寒櫻清見の寺に唯だ一枝しのぶ昔のある如く咲く（興津にて四首）

海長く天城を浮かべ駿河の日子の黒髪と梅花に當る

鶴嘴が東海道の線路をば掘り變へ梅の花咲く興津

大海のほとりにあれば夜の寄らん趣ならず闇襲ひくる

天地の春の初めを統べて立つ富士の高嶺と思ひけるかな（日本平にて三首）

類ひなき富士ぞ起れる清見潟駿河の海は紫にして

大いなる駿河の上を春の日が緩く行くこそめでたかりけれ

君と踏み書院に到る世のなきや四五十間の梅の花蔭（鐵舟寺にて五首）

我を見て過ぎたる時の返らざる理をのみ云ふ山河かな

早春のしのぶに餘りあることよ天城の靡き梅の花咲く

薄曇り立花屋など聲かけん人もあるべき富士の出でざま

長閑なり衆生濟度の誓ひなど持たぬ佛にならんとすらん

長岡の東山をば忘れめや雪の積むとも世は變るとも（長岡に遊びて五首）

北國の雪積む町の暮れて行くけはひを閉せる戸の中に聞く

鄙きて越の日射せばいみじかるみ雪の匂ひ立ちもこそすれ

美しき越の大河の背と見て恥なき雪の山續くかな

我が旅の寂しきことも古へも我は云はねど踏む雪の泣く

地中より水晶の木を拔き去りし後の餘沫とおぼゆる噴湯（瀬波温泉にて五首）

瀬波濱宿の主人が率ゐつつ至れる中にあらぬ君かな

里の人堆朱の技を樂める越の瀬波を春雨に行く

瀬波にて板屋の雪の上を打つ越の二月の雨聞く夜かな

安らかに松山竝び雪光る越の瀬波に春雨ぞ降る

芽を含む林の小枝分け難し憚らざらん翠帳ならば（伊豆の吉田にて六首）

椅子に居て我は未來を待つならず寄りも來ぬべき古へを待つ

湖上の氣外に流れて山莊の夜話の身に沁む二月かな

大空のあけぼのの雲湖の島谷山のうぐひすの聲

「小櫻」が母「櫻島」凌ぐまでよき乳牛となりて世移る

山と雲親しむ如く交りてかの世この世のあるよしもがな

華やかに網代多賀をば行き通へ泣くとて雨よ時歸らんや

ことは皆病まざりし日に比べられ心の動く春の暮かな（大磯に病みて五首）

いづくへか歸る日近き心地してこの世のものの懐しき頃

大磯の高麗櫻皆散りはてし四月の末に來て籠るかな

小ゆるぎの磯平かに波白く擴がるをなほ我生きて見る

もろともに四日ほどありし我が友の歸る夕の水藥の味

山傳ふ川の瀨早し我は知る時の流れのかくの如きも（小河内に遊びて六首）

我もまた家思ふ時川下へ河鹿の聲の動き行くかな

風の音水の響も曉の河鹿に歸して夏さむきかな

荷を負ひて旅商人の朝立ちしわが隣室も埋むる嵐氣

溪間なる人山女魚汲み行く方に天目山の靡く道かな

病には休みのあるを我は知る休むことなし旅の哀愁

雷が足柄山の東壁をよし裂かばとて君あるべしや（以下函根に遊びて）

莖長し原の菖蒲は菖蒲にて芒ならねど寂しきゆふべ

我が踏みて昨日を思ふ足柄の仙石原の草の葉の露

夕かげを帶びつつ未だ繭どもる仙石原の月見草かな

黄の萱の滿地に伏して雪飛びき奥足柄にありし古事

蜩が邊りを拂ふ聲に啼き仙郷樓へ道歸るかな

吹く風に沙羅早く落つ久しくも我は冷たき世に住めるかな

山の夏天より地より鶯の聲の涌けども朝日昇らず

箱根路に山法師花滿ちも咲く布より白く絹より鈍く

浴みして後に望めば湖も浴みしものの心地こそすれ（以上）

蜜柑の木門をおほへる小庵を悲しむ家に友與へんや（吉濱の眞珠莊にて三首）

集りて鳴く蟬の聲沸騰す草うらがれん初めなれども

足柄の秋の初風山を來て蓬が平の蓬吹くかな

我が爲めに時皆非なり旅すればまして悲しき涙流るる

我が友と淺間の坂に行き逢ふも戀しき秋に似たることかな

川の洲の焚火に焦げて蓬より火の子の立てる秋の夕暮（以下上山田にて）

過たず灯を取るべしと寄り來たる埴科の蛾も更科の蛾も

川暗く參勤衆の今宵あるけはひに灯おく戸倉宿かな

白波を指彈くほど上げながら秋風に行く千曲川かな

稲の穂の千田階をなし靡く時唯ならぬかな姨捨の秋

風吹きて一天曇り更科の山田の稲穂靑き秋かな

秋風が稲田の階を登りくる姨捨山の長樂寺かな

寺の僧當山のなど云ひ出づれ秋風のごと住み給へかし

更科の田毎の月も生死の理も瞬間に時移るため

我があるは上の山田の露天の湯五里が峰より雲吹きて寄る

更科の木も目あるごと恐れつつ露天湯にあり拙き役者

干杏干胡桃をば置く店の四尺の棚を秋風の吹く

秋風に柳動けり葉を落とす日もかからまし山田本町

更科の夜明けて二百二十日なり千曲の岸に小鳥よろめく（以上）

客となり備はるものの備りてある心地する山莊の雨（輕井澤にて二首）

淺間嶺と碓水の間雨深し水つきはつべし秋の八千草

新しく木の葉色づく山に入り昔の秋は思はずもがな（以下伊豆に遊びて）

岬にて三原の山と向ひつつ哀れなる火となる彼岸花

鈍色の蓬の絮の舞ひ入りて寂しくなれる我が車かな

旅の荷に柏峠の塵積り心に古き夢の重なる

大仁の金山を過ぎ嵯峨澤の橋を越ゆれば伊豆寒くなる

湯が島の落合の橋勢子の橋見ても越えてもうら悲しけれ

ほのじろくお會式櫻枝に咲き時雨降るなる三島宿かな

こと過ぎぬ今さら何を申すべき三島明神箱根權現（以上）

男體の秋それに似ぬ臙脂虎と云ふものありや無しや知らねど（以下日光に遊びて）

歌舞伎座の菊畑などあるやうに秋山映る湖の底

わが閨に水明りのみ射し入れど全面朱なり男體の山

宿墨をもて立枯の木を描ける外は白けし戰場が原

さるをがせなど云ふ苔の房垂れて冷氣加はる林間の秋

水色の楺の紅葉に瀧の名を與へまほしくなれる溪かな

搔き分けて楺の葉拾ふ奥山の紅葉の中に聖者もありと

そこばくの山の紅葉を拾ひ來て心の内に若き日歸る（以上）

我を知れ相模と伊豆を併せたる霧の中にて思ひ歎くと（多賀にて六首）

戸立つれば波は疲れし音となるささねば烈し我を裂くほど

網代臺網代の町の藥屋の店のうち見ゆ富士の高嶺も

櫨紅葉燃殼のごと殘りたる上に富士ある磯山の臺

三方に涙の溜る海を見て伊豆の網代の松山に立つ

故なくば見もさびしまじ下の多賀和田木の道の水神の橋

伊豆の海君をしのばず我も無き千年のちを思ふ夕暮（以下伊豆山にて）

伊豆の春漸く忘るなど云はん日のあるべしと思はれぬかな

連りて海にぞ浮ぶ岬てふ大魚何れも紫にして

家離れ伊豆を見ること稀ならずなりて己れの末期近づく

樟と月卑しからざる僧俗の二人對へる心地こそすれ

相模屋の磯先づ黄ばみ鳴澤の松山しらむ朝ぼらけかな

夕映に三原の煙臙脂さし海の一刻萬金に過ぐ

大島が雪積み伊豆に霰降り涙の氷る未曾有の天氣（以上）

山の月雪を照して我が友が四人に分つ振り出し藥（强羅にて三首）

山寺は雪に滿ちたる二月にて鉛の色す夕暮の庭

雪白き早雲山の頂きに近くねて聞く夕風の音

峠路の六里の間青海を見て枯草の世界を傳ふ（十國峠）

海に向き材木積める空地のみ僅かに白き夕月夜かな（また多賀にて）

梅花の日清和源氏の白旗を立てざるも無き鎌倉府かな（以下歸源院にて三回忌を營みし時）

落椿落梅を見てくらべらる都の塵と鎌倉の塵

鎌倉の梅の中道腰輿など許されたらばをかしからまし

梅咲く日繼浮の仙女となりて入る萬法歸源院の門かな

御佛に咫尺すれどもはかなしや限りこそあれ觀音力も

梅散るや放生會など行はばをかしかるべき大寺の池

松が丘梅の林を横行す心苦しや唐傘さして（東慶寺にて四首）

落梅は解脱すれども女にて甘き涙す苦き涙す

紅梅が秀頼の女の石塔に百歩すされる東慶寺かな

鎌倉の梅の中より鐘起る春の夕となりにけるかな

雲間より月漏れて射し松原に雨の音する山比が濱かな

古へは古へとのみ思はしめ法の家より朝寒き濱

風すさび彌生なれども曇る日は霙の色す鎌倉の海

極樂寺七里が濱の名も今はいぶかしきまでその世隔たる

鞦韆に我が子のありて松少し輝く山比が濱の春かな

天地にものの變などありしごと梅連りて咲ける鎌倉

黄昏に過ぐる北條邸ほど内の暗きを人見ずもがな（以上）

木のもとに散らし書めき蕨生ひ鶯啼けり湖の岸（以下伊豆の拋書山莊に遊びて）

道場に我なぞらへて坐しにこし湖畔の莊の春の夕風

夕風が俄かに泣けと迫るなり身に覺えなきことならねども

月落ちてのち春の夜を侮るにあらねど窓を山風に閉づ

山風や櫟にまじり生ひ出でし痩せし櫻も散らんとすらん

天城山萬二萬三も雲を出づ缺けたるものはただ我が世のみ

炭がまの邊りに立ちていつとなく山の小鳥の心地す我も

我出でて山と別るる日に踏むも前夜に出でて踏みしも落花

山出でて暫くの後多賀にありなほいかさまに時移るらん

網代村しのぶ昔のある人はなど憎からん魚の臭きも

波の上あはや宮本武蔵ゐて切りたるやうに鵜の姿なし（以上）

降りそそぐ木の下露は美しく雨の後なる渓川曇る（以下湯ヶ原にて）

繁山に草山圓く重りて蜂蜜茶屋と向ふ夏かな

東海を前にしたりと山は知り未ださとらず藤木川行く

山めぐる境にあれば歎く時愁ふる時も昨日に似ず

鶺鴒が酸き聲を立て山篠が甘き音立て瀧長く落つ

山路來て衣更へつつ思へるはなにがし瀧の白繻子の帶

梅の實の黄に落ち散りて沙半乾ける庭の夕明りかな

水の聲夜の雨の音雷鳴が護身法すと思ひなさまし

山の湯が草の葉色を湛へしに浸る朝もものをこそ思へ（以上）

我の來て君の再び來ずなりし下の河津に啼くほととぎす（以下南伊豆に遊びて）

今井浦君を見難し思へらく冥府に追ふともまたあらざらん

我の見て谷津の濱橋馬行かぬことを昔に似ずと云はんや

ほととぎす後ろを過ぎぬ松風は樓の續きの磯山に鳴る

ほととぎす螢の使來たれども君の歸らぬ古への濱

時移り鵜島の城も見張所も我も要なき身となりにけり

船著き場役者の幕に包まれて島へ渡るか悲しき荷物

安政の松陰も乘せ船の笛出づとて鳴らばめでたからまし

ありし日の蓮臺寺まで歸る身となりて下田を行くよしもがな

伊豆に來て我が失へる月日のみ繰りひろぐるを人な咎めそ

しどけなく鴉飛びかふ櫛の齒の如く正しく船並べども

武が濱波千度寄り千度去り變ることなし我が悲しみも

夜となりて入りくる船が吹く笛に月見草をばわが思ふかな

武が濱一時にして月滅し海の雨降る我が世のやうに

涼しくも黑と白とに裝へる大船のある朝ぼらけかな(以上)

水まさり岩の拳が濁流を突き上ぐることやめぬ川かな(以下また湯ヶ原にて)

病めるのち世捨人ともなりにけり我自らはつゆ知らぬまに

ままね湯に水戸黃門の浴びし世を人語るまに山暮れて行く

山川の橋は樓より覗くべし足柄の氣の浸す夕に

山の顏土用の畫をもてあぐむものなく蟬に聞き入れるかな

河原にて芥の燒かれ息苦し夕の空の澄むしるしなし

百人の泣女など枕邊に侍したるごとく藤木川鳴る

不具にも異ることのなき人を見出づる日來ぬ我の代りに

蜩がさし爪をして弦彈けばあらぬ蟬皆箱根へ逃る

濁流もまた清かりと眺めつつ山の女にならんとすらん

惡僧の七つ道具の一つかと橋越えくるを見れば三味線

我が重き病の後の七月も暑氣に窶れず思ひに疲る

笑ひこけ肩ゆすり行く波續く濁れる水の增したる川は

青葉長け皆常磐木にならんとじ竹のみ若く靡く七月(以上)

人よりも生きがひのある白樺の鄙く群に逢へる山かな（以下新嘉澤に遊びて）

亡き世とて共には越えず上州の三原の橋を秋來れば踏む

草まじり馬醉木ばかりの白樺の尾上に續き秋風ぞ吹く

四阿の山龍膽の紫をして立つ原の廣き秋風

蜻蛉飛び岩燕飛びその上に飛ばねど同じほど生ふる樺

咲く時を違へし山の新しき黄萱は折りて我が室に置く

花草の山を行きつつ他事ながら君が柩の思はれぞする

村上の千草の臺の秋風を君あらしめて開くよしもがな

北山の白根の風に負けし雨暫く降りて蟲の蟲鳴く

山山は未だ隱れず繃ばかりの雨の包める秋の夕暮

女鹿澗の大湯の土間を洞として人の通へる山の雨かな

白根の氣淺間おろしも冷やかに原を埋めて月白きかな

山風や疑ふやうに見てありし雲踏み越えし秋の夜の月

露踏みて山の大湯に我通ひ少し上飛ぶ岩燕かな

淺綠牧の草山うらうらと光放たんわが見ぬ世にも（以上）

斑尾は浮き漂へるものと見え心もとなき月明りかな（池の平にて五首）

妙高の山谷谷を雲晴れて月の眺むる夜となりにけり

山莊の簾は二つ妙高の左の肩に金星とまる

宿借りて萬の蟲の聲を聞く稀に廣かる妙高の原

妙高の白樺林木高くもなるとは知らで君眠るらん

火の事のありて古りたる衣著け一茶の住みし土倉の秋（柏原にて二首）

秋風や一茶の後の小林の四代の彌太に購へる鎌

湖の舟の動きし束の間に我唯今を忘れけるかな（野尻湖にて）

船を出で野伏に上り式根島石白濱へ越ゆる坂かな（以下伊豆の島島を廻りて）

紫の潮と式根の島の湯を葦垣隔て秋風ぞ吹く

式根の湯海氣封じて自ら浦島の子の心地こそすれ

白波が小島をつづり合せたる大圓なれる日の正午かな

秋の海まことに怪しきものの住む蛇島のみは掻き消せよかし

黒潮を越えて式根の島にあり近づき難し幽明の線

式根島世の竝竝に冷やけき秋の夕となりにけるかな

秋風が岩湯を吹けど他國者貌ふほどは海人驚かず

硫黄の香立てて湯の涌き青潮の入りて岩間に渦卷を描く

地奈多の湯海に隣れど人の世に近きところと思はずて浴ぶ

亡き人の興がりしことして遊ぶ岩傳ふなど恐しけれど

式根島潮滿ち來れば白波の渚となりぬ机の前も

海人少女海馬めかしき若人も足附の湯に月仰ぐらん

十五夜の石白濱に手浸せば波暖き式根島かな

唯だ二人岩湯通ひの若者の過ぎたる後の濱の夜の月

船移り小濱港の島姫が野伏の坂の白きに變る

新島の沙丘を負ひて人振るは間間下の宿の紫の旗

船入ると新島男旗振りぬ君が使のかからましかば

大海の新島芒松山の裾に煙りて秋風ぞ吹く

秋の日が島を卷きたる波に照り式根の心慰みぬらん

沙に居て淺草者の宿男島に逃れて來しわけを述ぶ

夜の船の乾魚の荷の片蔭にあれどいみじき月射してきぬ

松淡く港の山の頂に竝ぶ月夜の船の笛かな

水色の愁ひの煙わが方へ山憚りて吹かぬ大島

元村に島風寒し三原の火頭上を過ぐる心地こそせね

外輪の御神火茶屋の旗見えて君が驢行かず大島の山（以上）

何に逢ふ昔の何と指折りぬ誰に告ぐべき數ならなくに（富士五湖に遊ぶ三首）

いにしへの樹海の風の音起り見難き人を思ふ路かな

その高さ思ひ及ばぬ所より山の紅葉は舞ひ下るかな

山上の測候所をば墓と見る癖をいつより我得たりけん（また伊豆にて五首）

信濃路の更科郡の蕎麥畑の白さに海の變れる月夜

翅振り見覺えのある鷗來て暫く舞へる波の上かな

海原に霜の穂の立ち木枯しの朝もをかしき多賀の浦かな

しののめや夜すがら月に洗はれし跡かとばかり白けし岬

湯本なる石の館の二階より見ゆやと覗く哈爾賓の雪（湯本にて七首）

紅梅は雪より勝り白梅と星はそれよりやや劣るかな

この頃は病の休む暇ありて哀れを多く知る時まさる

身に負へる病癒えよと念ずべき時を忘れて物をこそ思へ

橋の下なんどに春の雪隠れ高きに梅の花溜り咲く

春の日に恥ぢて消え行く心ある湯本の雪と見え渡るかな

箱根風朝寒しとはなけれども生薑の味す川より吹くは

長き旗百日の忌に立てし後御寺は悲し白き梅さへ（圓覺寺にて）

紅椿君が忌月となりぬれば哀れ哀れと云ひつつも落つ

鵠沼は廣く豐かに松林伏し春の海下にとどろく

思はれぬ千年の後の春の日に櫻かくして散り行くことも（また吉岡にて圓首）

盡く櫻咲く日も散り初むる日も待つ人と知られずもがな

南國の星の大島櫻より大きく咲ける春の夜の空

落花をば伊東の竹の籠に盛りて大方の世を忘れゐなまし

桂川洲に分たれて行く水の皆弓形す春の夕暮（上野原にて三首）

卍字をも巴の圖をも春の水河原に描きて夕風の吹く

近き山浮き漂ふと云ふやうに綠をそなへ鶯の啼く

青芒花の蘂の間なる泥廊長く羊來て鳴く（比企にて）

紫の伊豆の天城の山口の嵯峨澤の湯の夕明りかな（嵯峨澤にて六首）

天城山嵯峨澤の湯の夕暮に明るき聲を連ぬる蛙

天城晴れ木の間に蝶の舞ひつつも夕立ぞ降る嵯峨澤の溪

提燈に螢を滿し湯に通ふ山少女をば星の見に出づ

石炭の中に琥珀のまじるごと螢ぞ飛べる嵯峨澤の夜に

秋風が濱名の橋を越えぬ間に凌霄花裳へてけり

眉白き長者の相も現には見難き君となりにけるかな（秋骨先生を悲しむ）

一つだに昔に變る山の無し寂しき秋はかからずもがな（伊香保に遊びて六首）

床几にて山上の茶を味はへば顔さし寄する黒葉の紅葉

心にも山にも雲のはびこりて風の冷たくなりにけるかな

相馬嶽榛名平に別れ去るまた遙ふ日など我思はめや

伊香保山かひなきことを忘れずば時雨の降りもやまじとすらん

故ありて云ふに足らざるものとせぬ物聞橋へ散る木の葉かな

赤谷川時雨降れどもいさぎよく越へ三機の飛ぶ灯影見ゆ（以下笹の湯に遊びて）

遥しき宿屋の傘を時雨止み大根の葉へ我置きて行く

川面へ二百六十尺と云ふ相生橋にたぢろぐ落葉

佛にはなるまじけれど楢の葉の金色の雨注ぎこそすれ

我が車山の角など曲る時昔の今に變りこそすれ

紅葉燃え三國おろしに時雨散り立ちぞ我が寄る法師湯の軒

三國山法師の湯さへ今は見て夢の如くに事入りまじる

法師の湯廊を行き交ふ人の皆十年ばかりは事無かれかし

うら枯れし蓬まじりに法師湯の立ちて三國の山おろし吹く

赤谷川人流すまで量まさる越の時雨はさもあらばあれ

日光の陽明門も流れ行く紅葉の山を出で來たる川（以上）

先立ちて歸りし友の車中の語聞かで知るこそあはれなりけれ

夕明り罌粟のごとあざやかに桂の川を現せるかな（また上野原にて八首）

下弦なる天のものよりなまめかし大河の上の月光の渦

萬石の月の光の溜れるに波そばえよる桂川かな

限り無き川絲遊に虹を染め山國の日の上り來しかな

早春の日の光にも救はれぬ枯草に身をよそふるは誰れ

千鳥啼き河原の上の五六戸が甘げに吸へる日の光かな

依水莊ほととぎすをば君と聞き落花に歎き今霜に病む

風寒し大菩薩より小河内にかけ山火事の擴がるを聞く

莊園へ水小ざかしく走り入り我は物憂き朝歩きする（また湯本にて八首）

浴泉し遊び呆けてある人に異らぬかな深く思ふは

雲にして山に紛ふも山にして雲に紛ふも咎むる勿れ

我が指の觸れんばかりに近くある彌生と覺え雨の音聞く

春雨の早雲寺坂行きぬべし病むとも君がある世なりせば

舊道が奥に濡るるを思ふ時寂し箱根の夜の春雨も

山林自在にくぐり入る日かげそれに從ふきさらぎの風

早春の池邊の室に山の氣の這ひ寄れど身の惱ましきかな

いみじかる梅の花かな湖の山に咲き出で湖に散る（また吉田にて四首）

調練の坂東の馬逞しく賴まるるかな春風の山

一陣は伊東の馬と云ふ中に白馬混らず梅立てる馬場

再生の荷葉と拜む大愚なき世に安んじてよく眠れ牛

青貝の螺鈿の富士を海に置き三津の櫻の夕風に散る（以下三津にて）

夕暮に散る足速き櫻見て己れのことは思はずもがな

富士の嶺に木花咲耶姫いまし盛りになりぬ東海の春

目に見ゆる櫻の花の喜びの漸く移り行く日となりぬ

山櫻天城おろしは苦しきか我も惱めり身を捨てじとて

麻の坂を上りて友の歸りこん時まで一人歎きてあらん

三津山の風に揉まるる斷崖の花を上より見るは不幸ぞ

雪厚し長濱村の船大工槌打つほどの赤石が嶽

網倉の隅の古網人ならば寂しからまし我がたぐひかは

重須より踵返さん風避けの船集れど借り難からん

山莊の菜根の食羹が昔を云ふはわりなかりけれ

雪白き富士に向ひて藥飲む延壽の術を知るやうに我

志良須魚入江に入ると山莊へ報のつたはり花散りて行く

三津の崎五松の莊の五つ松人にあらねど變る世無かれ

廣重が東海道の黃昏を敎へし色の擴がれる空

山莊へ風吹かれぬと取りに來ぬ天城なりせば子等いかにせん

紫の霞を愛すふつつかに牛臥崎のうづくまれども

千年の大瀨の柏樹をもて云へば君と訪ひしも近き古へ

相模路の山なだらかに霞引く草崩えたらん盜人厩も（以上）

櫻散る武庫を有馬へ入る路の上の唐櫃も下の唐櫃も（有馬に遊ぶ五首）

山櫻細き二條の水走り洲に夕日射す有馬川かな

有馬路の灰形山にゆくりなく立ち現はれし行く春の月

櫻散る湯治の客に山のもの商ふ市の立つ小道にも

花吹雪兵衛の坊も御所坊も目におかずして空に渦卷く

花見れば大宮の邊の戀しきと源氏に書ける須磨櫻咲く（須磨にて二首）

あはれなり敦盛塚は海近し船に心の動かざらんや

上人と故人の歌の碑と我と心の通ふ春の夕暮（鞍馬にて六首）

大かたは物を滅ぼす年月が金剛壽命本院作る

春の月出づるに代へて焚かれたる金剛壽命院の香かな

月を見る王侯の種もあらざるも隔てぬ法の山の樓臺

朝ぼらけ鞍馬の坊の廊續く東海道の長きが如く

たかだかと太鼓鳴り出づ鞍馬山八島にことの初まりぬらん

與謝の海成相の山行く春の雨氣に浸りて白波の立つ（以下橋立にて）

横雨に橋立の洲の濡れて行く末の四月の與謝の海かな

船下り船上りくる橋立の久世の切戸に慰まぬかな

汀より急に起れる橋立の切戸の山の山櫻花

絶え絶えの大江の山の紫もしごく霞も美しきかな

與謝の海大江の山の片端も我見て春を送らんとする

男山岩瀧の湯を田の卷きて蛙鳴くなりうら安く寢ん

橋立の松に向ひて陽炎の昇る宿屋の養魚場かな

我が涙文珠の濱に船著くと云ふにも散りぬ旅の末方（以上）

友ありて旅の終りに京洛の灯を見せしむる東山かな

日の本の今日の榮をその世より思し掟し極原の神（紀元二千六百年を祝して四首。以下凡て病床にて作る）

古の大和の宮に額づきし祖達のごと君に額づく

ひんがしの亞細亞洲をば導くと光を放つ菊の花かな

古に極原の神建てまして搖ぐことなき御太柱

木の間なる染井吉野の白ほどのはかなき命抱く春かな

病む人ははかなかりけり縺れたる文字の外にはこし方も無し

自らは不死の藥の壺抱く身と思ひつつ死なんとすらん

大君の都の中の大川にほとりして病む秋の初めに（實には幻なり、遺者）

明るくて紀子は樂し薔薇を摘み茅花拔く日も我れみとる日も

散る花の貴なりかかるものも見き越の黑部の曙の雪

我は病み山田五十鈴に子の顏の似ること聞こえ春の暮れ行く

本場所に勝を續くる角力ゐてわが脚腰の立たぬ春かな

寢ねて見る若葉よ潮來加藤洲の十二の橋もくぐる心地す

梢には十一面の觀音もけだものも置く圓葉の若葉

危しと命を云はず平らかに笑みて我あり友尋ね來よ

わが上に殘れる月日一瞬によし替へんとも君生きて來よ

千山や袖も二つの峰と見ゆ道士が著たる明朝の服

經文を傳法院に學ばんと貞子の語り蟋蟀の鳴く

日を經ては香に焦げたる色となる初めは白き山梔の花

身のいたしゆたのたゆたに縞葦の浸れる川へ我も入らまし

隅田川長き橋をば渡る日のありやなしやを云はず思はず

高き草露をこぼせば手榴彈投げたるもののある心地する

死も忘れ今日も靜に伏してあり五月雨注ぐ柏木の奥

紫薇の花紫薇の星ほど高く咲き鹿兒島城に紅の捲く

指宿に西瓜を買ひてわが歸る薩摩の途に紫薇赤く咲く

やがてはた我も煙となりぬべし我子の家の燒くるのみかは（以下依水莊に移りて）

海底に寢て魚を見る心地して蛾の往來する曉の闇

つぎつぎに霧より出づれ三國山、嶋田大橋、河原の芒

その昔島田の橋に君の會ひ我の會ひたる山の雨降る

唐傘のお壺になりし山風の話も甲斐に聞けばおどろし

甲斐源氏天目山に滅びたる三百年の後の秋風

濁流が桂の川を埋めつつ地獄繪めきし日も返り來よ

手觸れねど心細さのたぐひなし鼠の襁子の甲州の霧

蟋蟀がうすけきすけとしきりにも呼ぶ岩山の依水莊かな

都留郡巖の村の古岩に据ゑたる家の秋の初風

桂川鼠茅花の穗めきたる輕き月あり初秋にして

蟋蟀が鼠花火の聲となり寂しくなりぬ秋の明方

唉耶姫居ます山より流れ出で松風に逢ふ桂川かな

依水莊迎への車著到し雜木の山に秋風ぞ吹く

梟よ尾花の谷の月明に鳴きし昔を皆とりかへせ

はかなくて萬代不易たるものか君亡き後の尾花山莊

刈萱は烏の末の子と云はん顏して著たるぶつさき羽織

鈴蟲もはた蟋蟀も木の枝に登りて鳴けり家に歸れば(以上)

色づきし萬年草の蹶がるる高野の秋も寒かりぬべし

桔梗など刈萱堂に供へつつ高野の山を友の行くらん

友歸り金剛峰寺の西門の入日に我をよそへずもがな

片隅に柿浸されし上つ毛の古笹の湯の思はるる秋

紅の萩みくしげ殿と云ふほどの姫君となり轉寢ぞする

正月に知れる限りの唱歌せし信濃の童女秋も來よかし

うす煙霧に添ひてまつはれる黃梅院の二本紅葉

鵜飼船篝こぼしぬ大きなる花の蕊など崩るる如く

神無月黃なる大木の廣葉より露しどけなくくだす朝かな

我が友の墨の蘭花の繪を見つつ寂しき冬に入らんとすなり

日の本の大宰相も病む我も同じ涙す大き詔書に

水軍の大尉となりて我が四郎み軍に往く猛く戰へ

子が船の黑潮越えて戰はん日もかひなしや病ひする母

子が乘れるみ軍船の訪ひを待つにもあらず武運あれかし

戰ある太平洋の西南を思ひて我は寒き夜を泣く

禪院のそとの高松水色に霽けぶりて海遠く鳴る

鵠沼の松の敷波ながめつつ我は師走の鶯を聞く

滿洲の野山を開くますらをも櫻咲く日は見に歸れかし

ますらをは黒龍江の白魚など肴にしつつ盃あげん

古き國わが御祖達開きたるアジヤの北の土に親しめ

三千年の神の教へに育てられ強し東の大八島びと

畢

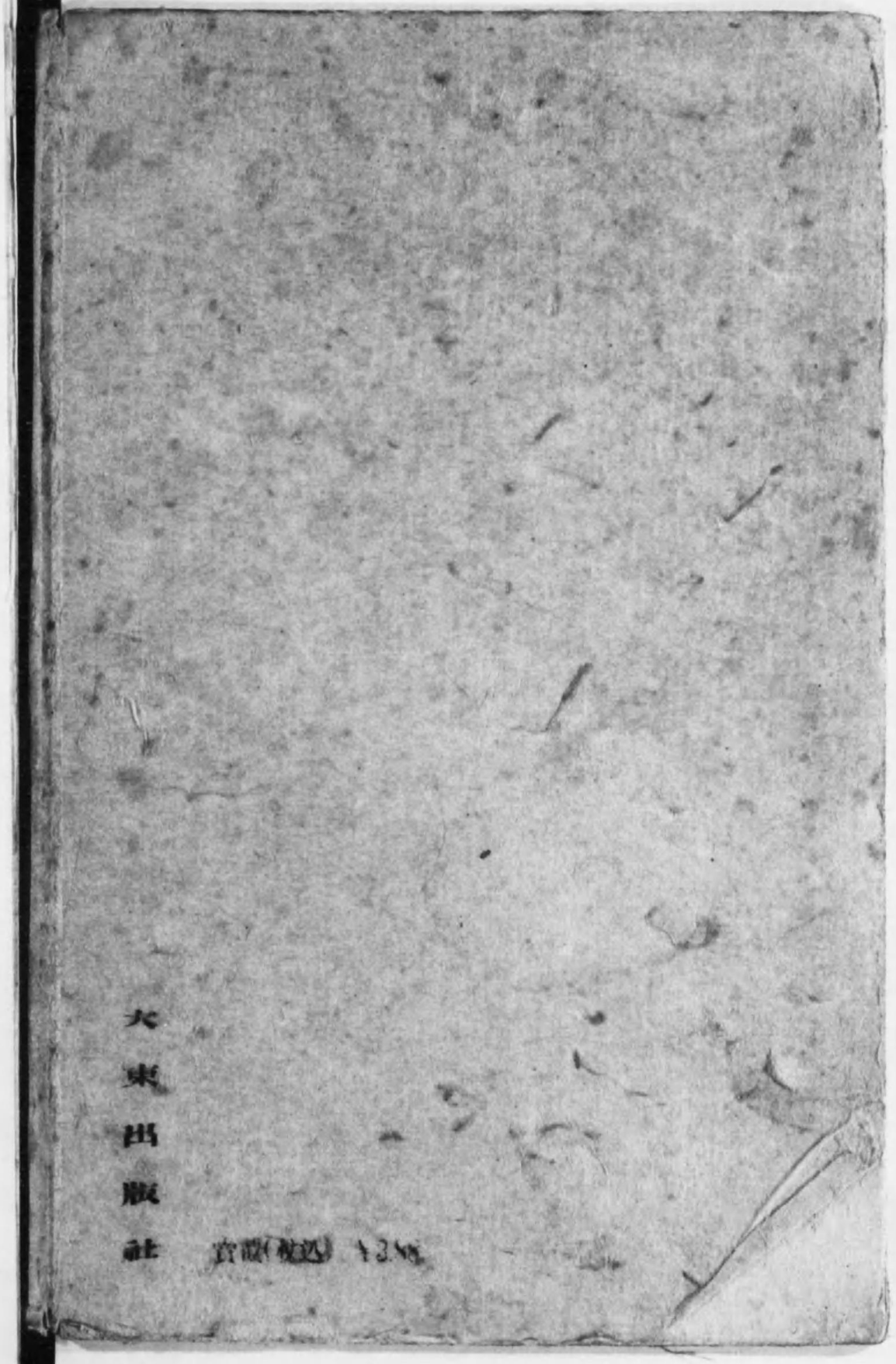
昭和十九年二月十日　印刷
昭和十九年二月十五日　發行
（初版二、〇〇〇部）
㊙定價　三圓八十錢
特別行爲稅　八錢
實價　三圓八十八錢

（出版會承認い320672）
選歌秀子晶

著者　與謝野晶子
發行者　岩野眞雄　東京都芝區芝公園七ノ十
印刷者　鈴木赳武　東京都神田區三崎町二ノ一
配給元　日本出版配給株式會社　東京都神田區淡路町二ノ九
東京都芝區芝公園七號地十番
大東出版社
會員一一六五三六
振替東京一九四七一
電話芝(43)三九四四

日本古典の精神　久松潛一　二・〇〇
神話と神話學　中島悅次　二・五〇
日本の傳說と童話　志田義秀　二・〇〇
連歌の道　福井久藏　二・〇〇
書物と江戸文化　森銑三　一・八〇
敎化と江戸文學　三田村鳶魚　一・八〇
集古隨筆　林若樹　一・八〇
近世笑話文學　宮尾重男　二・〇〇
日本劍豪列傳　直木三十五　一・八〇
創作親鸞　倉田百三　一・五〇
歌集下町の灯　岩野喜久代　三・〇〇
近代の小說　田山花袋　一・八〇
空想と現實　正宗白鳥　一・七〇
生々抄　上司小劍　一・七〇
散華抄　岡本かの子　一・八〇
近松門左衛門　黑木勘藏　二・〇〇
近松以後　黑木勘藏　二・〇〇
明治の演劇　岡本綺堂　二・〇〇
歌舞伎談義　岡本綺堂　一・五〇
近世の畫家　森銑三　二・〇〇
浮世繪と版畫　大野靜方　二・三〇
俳話　內藤鳴雪　二・〇〇

大東出版社刊行

984
171

終